

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284071

研究課題名(和文) 地域・家庭の言語環境と日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する調査研究

研究課題名(英文) Study on language environment of community and family and the literacy development of foreign children born in Japan

研究代表者

齋藤 ひろみ (SAITO, Hiromi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：50334462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,600,000円

研究成果の概要(和文)：国内でも外国人の児童生徒が増加しているが、日本生まれ日本育ちの子どもの言語発達支援・教育が新たな課題となっている。本研究では、こうした日本生育外国人児童生徒(日本籍の児童も含む)のリテラシーの発達について、作文を書く力に焦点化して調査を行った。外国児童生徒と日本人児童生徒から、出来事作文と意見文作文という2つのジャンルの作文データを収集し、産出量、表記、語彙、文法、内容構成等の観点で分析を行った。その結果、産出量、社会性の表出には日本人児童と同等の発達が見られたが、特殊音表記、文法適格性、結束性、陳述の適確さ・多様さ、論理性にやや遅れが見られ、これらを意識した指導が求められる。

研究成果の概要(英文)：Supporting language development of children who were born and educated in Japan (hereafter call them 'foreign children') has become a new issue. In this research, we tried to describe their literacy development through analyzing their essays. Essays on school event and opinion essays, written by foreign and Japanese children were collected. Then analyzed them from the perspectives of output, notation, vocabulary, grammar, structure of the contents, etc. and made a comparison of the result between foreign and Japanese children. The development of the quantity of output and expressing their sociality were similar in both groups. However, slight delays were observed in foreign children in the area of writing special syllables, grammatical competence, cohesion, diversity and appropriateness of the statement, logicity. To support literacy development of foreign children born in Japan, instructions which considered these characteristics is required.

研究分野：日本語教育 子どもの日本語教育

キーワード：リテラシー 日本生育外国人児童生徒 日本語作文の力 言語環境 出来事作文 意見文作文 思考・判断力 社会認識の形成

1. 研究開始当初の背景

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査(平成24年度)」によれば、日本語指導が必要な児童生徒は27,013人であり、その約25%は在籍年数が5年以上である。また、日本籍であるが日本語指導が必要な児童が4,662人(帰国子女を除く)おり、日本生まれや幼少期来日の外国人(以下日本生育外国人児童)、あるいは国際結婚家庭の子どもで、日本に長期的に滞在し日本国籍を有していても日本語指導が必要な児童が少なくないと推察される。本研究に先行して行ったH22-25年調査の対象小学校もそうした学校の一つである。

移民タイプの児童の言語の発達と学力について、2003年に実施されたOECDによるPISA(Program for International Student Assessment)では、移民1世の子どもの読解リテラシーはネイティブに比べて下回り、その傾向は移民2世でも同様に見られる。彼らの多くが社会経済的状況の低い家庭の子どもが集まる学校に通っているという調査結果が報告されている。リテラシーの発達が地域・学校の言語環境の影響を受けている可能性が示唆されるが、日本国内の外国人児童数が多い学校の多くも外国人住民の集住地域にあり、同様の状況である。

言語環境とリテラシーの関係について、Guthrie(2004)は、マイノリティ言語児童のリテラシーは、読み書きの量と幅、テキスト理解のための効果的なストラテジー使用、読み書きへの積極性とアイデンティティへの投資が、主要な構成要素であるとする。また、Linsay(2010)によれば、印刷物へのアクセスが読みの行動・教育・心理面の主要因であるという。子どもたちの生活する地域及び学校、家庭の「読み書き」活動の有無、「印刷物」へのアクセスが、子どものリテラシー発達を左右する環境要素だと言えそうである。

2. 研究の目的

本研究では、近年国内の外国人児童生徒教育の領域で課題として注目されている、日本で生まれ育った児童・生徒(日本生育外国人児童生徒)の言語発達の問題について、地域・家庭の言語環境とかれらのリテラシーの発達との関係に着目して調査研究を行う。平成22-25年度の基盤研究(C)では、日本生育外国人児童の作文力の発達を「出来事作文」の分析結果から描いた。本研究ではそれを発展させ、「意見文作文」の分析を、低学年では社会との関わりと述べ方の発達、中学年では説得性と述べ方、高学年では論理展開と述べ方に着目して分析を行い、思考力、社会認識と作文を書く力の発達という視点でリテラシーを捉えることを目的とした。また、言語環境によるリテラシー発達の違いを、日本人児童との比較によって検討する。

3. 研究の方法

外国人集住地域の小学校の協力を得て、外国人児童生徒(以下F)と日本人児童(以下J)より2タイプの作文(出来事作文と意見文作文)を収集し比較、分析を行う。外国人児童は約90%が日本生育である。

出来事作文に関しては、産出量・表記・文法の誤り、内容面(出来事の記述、情景描写、心情表現等)について、一方、意見文作文では、タスク達成度、形式面、内容面(タスクにより観点を設定)、陳述の仕方を分析した。分析結果を、F、Jを比較し、次の点から考察を加えた。

- ・出来事作文は2-6年の縦断調査とし、Fの作文の力の発達には、どのような特徴があるのか。また、家庭内の母語使用が作文の力の発達に関係があるのか。
- ・意見文作文では、自己認識や社会認識の表出、論理構成、述べ方(陳述の力)等の発達に、どのような特徴があるのか。また、低・中・高学年による発達にJとの違いはあるのか。

4. 研究成果

研究成果として、出来事作文の量的調査からは、Fの作文の力として、特殊音の表記や文法の適格性・結末性に課題が見られた(菅原・齋藤2016、工藤2016)。ここでは、出来事作文に関する内容分析の縦断調査の結果、低学年の意見文作文の横断調査の結果、中学年の意見文作文の横断調査の結果を、簡潔に報告する。(それ以外の研究成果に関しては、論文・学会発表等で公表しており、そちらを参照いただきたい。)

4.1 出来事作文の内容面の発達 縦断調査

5年分の作文が揃っている児童に関し、作文の内容面の発達の特徴を、日本人児童と比較して捉えることを目的とした。また、外国人児童の家庭内言語との関係を検討した。

(1) 分析対象

「全校遠足」についての自由作文で、指導を入れずに書いた作文データ345件。外国人児童(以下F)が48名・日本人児童(以下J)が21名、計69名の2-6年(5年分)の出来事作文である。Fの民族背景はベトナム26名、中国11人、カンボジア6人、ラオス3人、フィリピン1人、バングラディシュ1人で、90%以上が日本生育である。

(2) 分析方法

6項目(下のA~F)5段階のルーブリックにより評価(3名)し、各項目の平均に関し、F、J別、経年変化、学年間の伸びを比較する。

- | | |
|------------|---------|
| A 文と文のつながり | B 段落・構成 |
| C 出来事 | D 状況・描写 |
| E 心情の叙述 | F バランス |

(3) 結果

全体としては(図1) 3から4年にかけて急速に内容面で作文の力が発達する。一方、個人差も広がっていた。項目別(図2)では、内容の叙述に関わる項目C・D・Eで、Fは1-5年の差を6年で逆転しており、同等の発達を示すが、構成に関わる項目A・Bに関しては、僅差ではあるが6年間一貫してFが低い。また、6年時の作文で上位の児童は、2-3年、5-6年で下位群より伸びが大きい(図3)。その傾向は、Fにより強く表れていた。Fの上・下位群と家庭内言語との間には有意な関係はなかった。

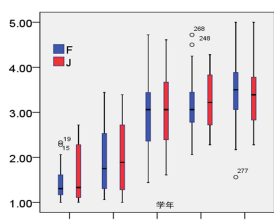


図1 総合点平均

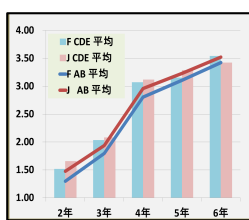


図2 項目別平均

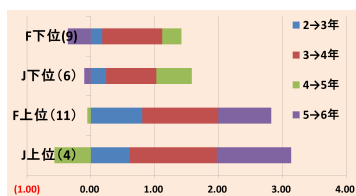


図3 学年間の伸びの(積み上げ)

上位: G総合4点以上計15名(F11、J4)
 Fの家庭言語: 母日7、母2、母母1、母母日1
 下位: G総合3点未満 計15名(F9、J6)
 Fの家庭言語: 母日3、母5、日1

4.2 低学年の社会性の表れと陳述の力の発達

- 1、2年の意見文作文の分析より

小学校就学後、FとJの作文の力がどのように発達するかを、タスク達成度、形式面のスキル等、多面的に分析を加えた後、作文に表れる社会・自己の認識と、陳述の力に代表される作文の技能の発達に着目して考察する。

(1) 分析対象

次の指示で(指導なし)書いた作文99件。

あなたのおうちでペットをかうことになりました。「いぬ」と「ねこ」、どちらをかわりたいですか。どうしてですか。りゆうを3つおしえてください。

作文データの数は、1年生の作文が54件(F30件、J24件)、2年生の作文が45件(F24件、J21件)で計99件である。Fはベトナム26人、中国13人、カンボジア7人、ラオス4人、フィリピン2人、ブラジル1人、タイ1人で、就学前来日が1年に6人、2年に3人いるが、他は日本生育である。

(2) 分析方法

作文を次の3側面から分析を行った。

タスク達成度: 選択表明の有無

スキル: 形式段落の有無、構成を表す標識の有無、述べ方の多様性

理由: 理由の内容(社会・自己認識の現れがあるか)

(3) 結果

タスク達成度: ペット選択の表明については、1、2年のF、Jとも80%以上が達成していた。

形式面では、形式段落は1年生ではF、Jともに40%に見られるが、2年ではJが約80%でFが60%と差が現れた。また、構成を表す標識は、2年Jの20%で使われているが他にはほとんどない。

理由: 1年では様態が理由として最多である。2年では特性が増加し、家族の意見や飼育条件、生じる問題等、自己と社会との関係

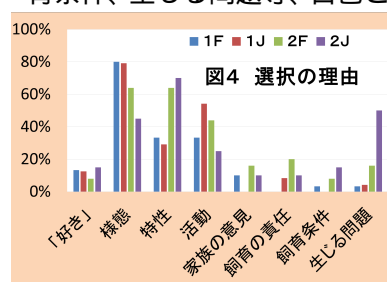


図4 選択の理由

を意識した理由が見られ、僅かであるが2年Jでその傾向は強い。

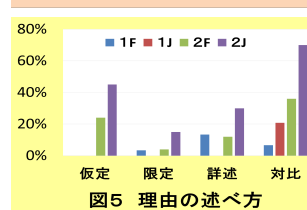


図5 理由の述べ方

また、1年では理由の述べ方に工夫がほとんどないが、2年ではF、Jともに工夫が見られ、Jにその傾向が

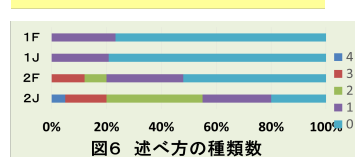


図6 述べ方の種類数

強い(図5・図6)。

以上より、入学後の組織的学習で、F

もJも形式面の作文スキルを獲得し、社会との関わりから理由を考え、述べる力を高めていることがわかる。ただし、Fの場合、その発達がJに比べ遅れ気味で、2年では、特に陳述する力に差として現れる。

4.3 中学年の説得性と陳述の力の発達

3、4年の意見文作文の分析より

縦断調査の結果、内容面の作文力の発達は、中学年で際立っていた。また、上述したように、低学年では、Fに陳述の力が僅かであるが遅れて発達する傾向が見られた。そこで、中学年の意見文作文を分析し、陳述力と、意見文に求められる説得性・明確さに着目して発達の特徴を考察する。

(1) 分析対象

次の指示(指導なし)で書いた作文75件。

あなたは無人島に行きます。『ライター』と『ナイフ』、どちらか一つを持てていくことができます。あなたなら、どちらを持っていきますか。なぜですか。理由を三つ書いてください。

3年生の作文が31件(F17件、J14名)4年生の作文が44件(F20件、J24件)計75件である。Fは、ベトナム16人、中国16人、カンボジア3人、フィリピン1人、ラオス1人である。6歳、7歳、9歳での来日が各1名いるが、以外は日本生まれである。

(2) 分析方法

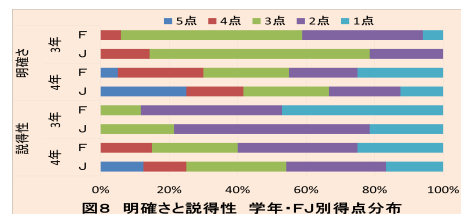
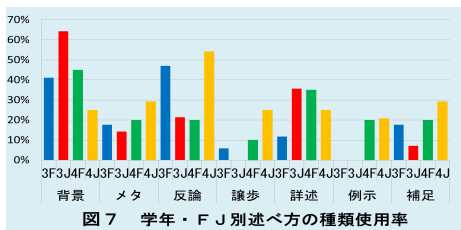
作文を次の3側面の分析に加え、説得性と明確さについて、ルーブリックを作成して評価を行った(日本語教師歴10年以上の3名による)。

- タスク達成度：選択の表明
- 文章構成：三部構成(冒頭部・展開部・終結部)の有無、主張の位置(頭括・尾括・双括)、段落相互の関係
- 理由の述べ方：次の機能を用いているか
a 背景、b メタ的言及、c 反論、d 譲歩、e 詳述、f 例示、g 補足

(3) 結果

タスクは選択表明が全作文で見られ、理由の言及は、両学年ともFがやや低いが、85%以上が3つの理由を挙げている。三部構成は、F、Jともに、3年ではほとんではないが、4年では50%弱の作文に見られた。一方、要約やまとめのある作文は、4年で、Fで20%、Jで30%あった。段落相互の関係を意識して構成する力の発達には、僅かであるが違いが見られる。

理由の述べ方(図7)では、4.2で紹介した1-2年に比べ、多様な述べ方で説得を試みていることがわかる。Jが3年から4年にかけて、背景、詳述から、反論、メタ言及、譲歩、例示・補足へと変化しているのに対し、Fは、反論が減り、詳述、例示が増えている。



明確さと説得性(図8)のルーブリック評価の結果は、3F<3J<4F<4Jとなっており、FとJの差異以上に、学年による差が大きく、両者とも学年に伴う発達が見られる。

ただし、述べ方が多様化しても3年では、明確さ・説得性とは関係が見られない。4年で、Jには、多様化と明確さ・説得性に一定の関係があると考えられるがFにはそれは

見られない。(図9・10)

以上より、F、Jとも3から4年にかけて、三部構成の意見文を書く力は徐々に高まる。一方、Jが4年で陳述の仕方の変化と論理性に統一性が出てくるのに対し、Fにはそれが見られず、Fは述べ方の多様性、明確さ・説得性に関しては、Jとは異なる発達の特徴があると言えそうである。

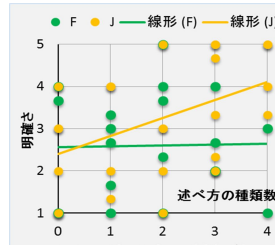


図9 明確さと述べ方

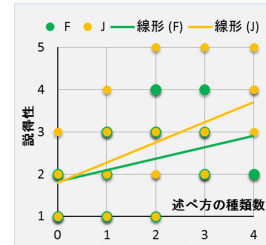


図10 説得性と述べ方

4.4 総合考察

4.1~4.3の結果、及びその他の本研究の分析結果から、現段階では、外国人が集住する地域の学校で学ぶ日本生育外国人児童の場合、その作文の発達に関しては、以下の特徴があると言えそうである。

産出量、作文の形式や構成に関わる技能は、中学年までに日本人児童と大差のない力を身に付ける。社会と自己の認識の作文での表出も見られる。しかし、特殊音表記、文法適格性、結束性、陳述の適確さ・多様さ、論理性には日本人児童に比べ、やや遅れが見られ、これらを意識した「書くこと」の指導が求められる。

なお、日本生育外国人児童の家庭内での言語使用との関係に関しては、本研究では明らかにすることはできなかった。

<参考文献(主なもの)>

伊集院郁子・盧ジュヒョン(2015)「日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴 日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較」『社会言語科学』第18巻第1号, pp.147-161

内田伸子(1990)『子どもの文章』東京大学出版会

大熊徹(1994)『文章論的作文指導 論理的思考力・認識力の育成』明治図書

岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波新書

国立国語研究所(1964)『小学生の言語能力の発達』明治図書

佐野愛子・中島和子・生田裕子・中野智子・福川美佐(2012)「海外在住小中学生のバイリンガル作文力 言語高度発達型と二言語低迷型の質的分析」『母語・継承語・バイリンガル教育研究会2012年大会』pp.5-7

田島信元・子安増生・森永良子・前川久男・菅野敦編(2003)『認知発達とその支援』ミネルヴァ書房

坪根由香里・田中真理(2015)「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」

「いい構成」を探る 評価間の共通点・相違点から」『社会言語科学』18 巻 1 号，pp.111-127
文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 国語編』（平成 20 年版）大日本図書

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 21 件)

齋藤ひろみ (2017)「こどもの「ことばの表現力」を高める - 外国人の子どもの作文分析の結果から」『教育と医学』763 号，pp.74 - 83 査読無し (依頼)

菅原雅枝・齋藤ひろみ (2016)「日本生育外国人児童の「表記の力」に関する縦断調査 - 作文の分析を通して - 」『国際教育評論』、No.13，pp.19 - 36，査読なし

齋藤ひろみ・巽田陽子・菅原雅枝・森篤嗣・阿部志野歩・北澤尚 (2014)「日本生育外国人児童の作文力に関する調査-小学 2 - 6 年生の「出来事作文」の計量的分析」『国際教育評論』No.11，pp.53-65

〔学会発表〕(計 31 件)

田中祐輔・齋藤ひろみ・森篤嗣「JSL 児童が在籍学級の学習に参加するための日本語 - 教室談話と教科書の語彙分析の結果から - 」子どもの日本語教育研究会第 3 回大会，2018

齋藤ひろみ・菅原雅枝・三好大・李佳耀「日本生育外国人児童の小学校低学年におけるリテラシーの発達 日本語による意見作文の「理由」に着目して」異文化間教育学会第 38 回大会，2017

菅原雅枝・齋藤ひろみ・巽田陽子「外国人児童の小学校中学年における「考え方を述べる力の発達」 「意見文」の分析を通して」社会言語科学会，2017

岩田一成「話しことばチェッカーの機能と作文分析の結果」多様な言語文化背景をもつ子どもたちのリテラシーフォーラム 4，2017

橋本ゆかり、「言語習得のメカニズムから考える外国人児童生徒のリテラシー発達 理由表現に焦点を当てて - 」多様な言語文化背景をもつ子どもたちのリテラシーフォーラム 4，2017

齋藤ひろみ・菅原雅枝・李佳耀「外国人児童の作文の内容に関する縦断研究」異文化間教育学会第 37 回大会，2016

工藤聖子「日本生育外国人児童の「出来事作文」にみられるねじれ文の分析 - 接続形式「て」に注目して - 」子どもの日本語教育研究会第 1 回研究会，2016

齋藤ひろみ・森篤嗣・岩田一成・中村和弘・池上摩希子「外国人児童のリテラシー発達を支援する - 作文分析の結果を受けて - 」日本語教育学会 2015 年度秋季大会，2015

〔図書〕(計 15 件)

橋本ゆかり (2018)『用法基盤モデルから辿る第一・二言語習得段階 - スロット付きスキ

ーマ合成仮説が示す日本語の文法』風間書房，206 頁

岩田一成編著、他 5 名 (2017)『日本語宝船 日本で生活する外国人のためのいろいろな書類の書き方』アスク出版，119 頁

森篤嗣 (2016)『ニーズを踏まえた語彙シラバス』くろしお出版，280 頁

齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子 (2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践 - 「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み - 』くろしお出版，253 頁

〔その他〕

ホームページ等

子どもの日本語教育研究会

<https://www.kodomo-no-nihongo.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤ひろみ (SAITO, Hiromi)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：50334462

(2) 研究分担者

・森 篤嗣 (MORI, Atsushi)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：30407209

・橋本ゆかり (HASHIMOTO, Yukari)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：40508058

・岩田一成 (IWATA, Kazunari)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：70509067

(3) 連携研究者

菅原雅枝 (SUGAHARA, Masae)

東京学芸大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：80594077